自ら考え、命を守る行動ができる力を育てる
防災・防犯教育

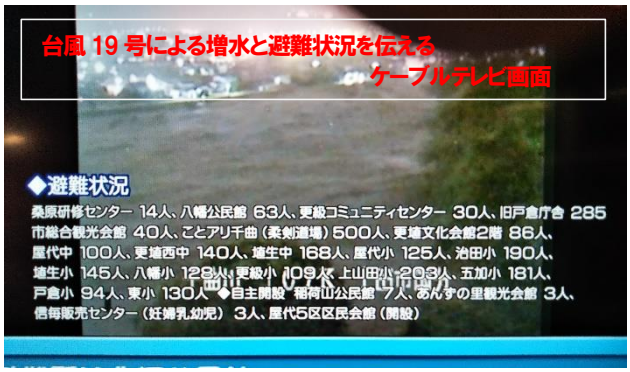
千曲市立八幡小学校　　宮坂　久美子

1　研究のテーマ

自ら考えて自分の命を守る行動ができる力を育てるための防災教育・防犯教育を、どのように推進していったらよいか。

2　ねらい

私たちのふるさと千曲市も近くの長野市や上田市も、あの台風１９号では甚大な被害を受けた。景観の中心であり市民の心のよりどころでもある千曲川は、10月12日、竜のように暴れたのだ。あの日、テレビからは「命を守る行動をとってください」と呼びかけるアナウンサーの声が何回も聞こえた。本校も避難所となり、命を守るために 200 名以上の市民が一晩を過ごした。



〝災害の時代〟と呼ばれた平成が終わったのに、直後に身近で起きた災害である。平成に起きた大きな地震、水害などが遠くのできごとのようであった私たちは、令和になって災害が実は自分のすぐ近くに起こるものだという現実を突きつけられた。

また、平成の時代に起きた池田小学校の事件等から重要視されてきた防犯教育も同様である。下校途中や登校前に命を落としてしまった小学生がいたことがまだ記憶に新しい。

私たち学校は、未来を担う子どもたちが、災害や犯罪から自らの命を守るための行動ができる力を育てていかなければならないのだが、それができているだろうか。

来年度から全面実施される新学習指導要領では、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」を育成することを大切にしている。

これらのことから、本年度、安全教育を見直した。より現実的で臨場感がある避難訓練・防犯訓練、児童が主体的に考え、行動する避難訓練などを通し、命を守る行動ができる力を育成していきたいと願い、本テーマを設定した。

3　経過と内容

1　自ら考えて行動する避難訓練へ

本校の避難訓練もやはり、昭和の時代からほとんど変わらない時期、想定、方法で行われていた。問題と感じたのは次のような点である。

①「職員の指示に従う」行動をとることがねらいのひとつになっていた。子どもが自分で判断し、行動する場面がほとんどなかった。

②事前指導にかける時間が少ないため、「おはしも」のような行動のきまりを確認する程度の内容で、教師側からの一方的な指導になりがちであった。また避難訓練の評価が「だまって整然と行動できていたか」という点に偏ってしまった。

③火事や地震の「想定」が毎年同じであった。地震が起きるのは、毎回教室だったし、休み時間の訓練は２時休みの後半に行われるのが当たり前だった。

④職員にとっても安全教育としての意義よりも、実施計画通りに滞りなく終わることに気持ちが向いて、こなすだけの行事となりがちであった。

このように、従来の避難訓練は職員にとっても児童にとっても、思考力や判断力を育てることにはつながっていなかった。当然、自分の身を守るための行動がとれる子どもを育てるには不十分であったと言わざるをえない。

今年度八幡小学校では ３ 回の避難訓練が予定され

ていた。１回目については年度当初の基本確認の意味もあり、従来通りに実施したが、２回目、３回目については内容を検討し、新しい避難訓練を行った。

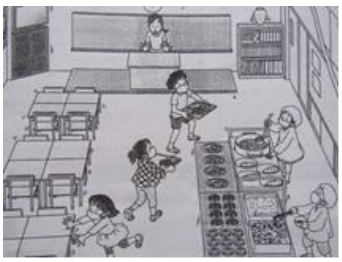
（１）もしもここで地震がおきたら

２回目の避難訓練は９月４日に計画されていた。従来通りであれば、通常の教室にいるときに地震が起き、自分の机の下にもぐって身の安全を確保、その後火災発生により校庭に避難するという方法である。

今年は次のような工夫をして子どもたちが考える場面を大切にした訓練を計画した。

① ワークシートを使って考える

１～4 年生は、日本赤十字社の「青少年赤十字防災教育プログラム　まもるいのちひろめるぼうさい」のワークシートを用いた事前学習を行った。「緊急地震速報が鳴ったらどうする？」のワークシートでは、学校にいるとき、家にいるとき、自分はどのように行動すればいいか考えて話し合った。「学校で地震が起きたとき、あぶないものは？」のワークシートでは、給食の準備中に地震が起きたとき、あぶないものをイラストの中から探し、自分はどう行動するか考えて話し合った。



② 特別教室からの避難を考える

５・６年生は、特別教室に移動してその場で地震が起きたら、どんな危険があるか、自分はどんな行動をとったらよいか、そしてどこを通ってどう避難するかについて現地で考えた。

５年生⇒図書館　６年松組⇒パソコン室

６年竹組⇒音楽室

図書館で身を守る

音楽室で身を守る

子どもたちは、特別教室の物品や天井、出入り口の位置などを改めて見て考えを出し合った。その後、実際に避難行動に移したことをまとめの会で発表し、全校に広げた。

校長が避難の様子を児童にインタビューする

図書館・・・本棚から離れた机の下にもぐって、身を守る

PC 室・・・机の下にもぐり、入り口のドアを開け、逃げ道を確保する

音楽室・・・机がないので、教室の真ん中に集まり、音楽袋で頭を守る

５・６年生が実際に体験し、語った避難の仕方については全校児童が真剣に聞き入っていた。

③けむり体験

消防署の協力により、けむり体験を行った。消防署員よりけむりの危険性について教えていただいた後、けむりハウスの中を一人ずつ進んでいった。短い距離ではあったが、身をかがめてもなかなか前が見えないという状況を初めて体験した児童が多く、万一の時に役立つ学習であった。

２回目の避難訓練を終え、職員からは次のような感想が寄せられた。

・５・６年生は実際に特別教室に行くことで、より現実味のある事前指導を行うことができた。
・ワークシートを利用したことで、しっかり考えることができる事前指導になった。
・図書館では、本棚が倒れてきたらどうするか、机の下にどのように入れば身を守れるのか、ベランダにある避難はしごはどう使うのか、など防災の視点を明確に持つことができた。
・いつもと違う場所で、命を守るという視点でよく考えて実践できた避難訓練だった。
・これからもより現実的でその時の状態にあった動きがとれる避難訓練を検討していきたい。

また、この訓練の様子を見てくださっていた消防署員の方からも

・考える訓練で、生きている訓練でした。
・指導する先生もよく考えて、想像力を働かせて身を

守ることについて学ぶことができていました。
と、講評をいただいた。命を守るための行動を考えることの意義が実感できた避難訓練となった。

（２）休み時間の避難訓練見直し

休み時間、教室にいないときの避難訓練の計画は１１月であった。９月の避難訓練のように、想定を見直し、子どもたちが自ら考えて行動できる内容で計画した。

①避難訓練の時刻を変える

２時休みが当たり前だった訓練の時刻を、清掃直後に設定し、実施した。清掃場所は、特別教室、廊下、トイレなど様々である。児童にとっても、先生方にとってもこの時間帯の避難訓練は初めてであった。

②集合場所に集まるのをやめる

休み時間等に火事や地震が起きたときは、決められた場所に集まり、担当の先生の到着を待ってその指示で避難することになっている。しかし、この方法は現実的ではないと考えて、緊急集合場所を撤廃することとした。

児童が自分で得た情報（放送など）と自分が今いる場所から、どこから逃げたらよいかを考えて行動できるような訓練を計画することとした。

③事前指導で考える

大切に考えたのは事前指導である。担任は、校内の何か所かに児童を連れていき、もしここで火事があって避難するとしたら、どこを通ったらよいかを考える場面を設けた。

１年生の指導の様子

写真は１年生の学級指導の様子である。

また、１週間ほど前に「聞き方訓練」として、放送を聞き、自分はどこから避難したらよいかをイメージする訓練を行った。子どもたちはベルが鳴った後、その場に座って放送を聞き取った。その後担当の職員と訓練の振り返りを行った。写真の北校舎３階では火元の確認をした後、どこの階段を使ってどこから外に出ればよいかを話し合った。また、高学年は低学年をリードすることも確かめた。

聞き方訓練　事後指導の様子

④いよいよ本番

事前に児童には知らせていなかった避難訓練。清掃後に行ったことで、戸惑いの表情もあったが、それぞれの場所から自分で避難場所へ集まってくることができた。

その後、「行方不明者あり」の状況をつくり、職員が分担して探し、情報を伝達する訓練も行った。緊迫した雰囲気を感じながら心配そうに見守る児童の姿があった。

まとめの会では、高学年児童にどこからどのように避難したか尋ねた。

４年生児童　職員室から４年教室に上がる階段にいました。いちばん近い出口から校庭に出ました。

５年生児童　家庭科室にいました。火元が職員室だと聞いたので、家庭科室からすぐに外に出て南を通って避難しました。

６年生児童　生活科室付近にいました。ベルが鳴ったら、１年生がしゃべってしまったので注意して、避難しました。

それぞれ、自分のいた場所でどう行動すればよいか考えて避難ができたようであった。

職員からも、

・その場に（放送がよく聞こえる場所）に行って座り放送を聴くというやり方はいざという時に役立つやり方でよい。これまで、決められた場所に行くというやり方であったが、その場できちんと聴き、自分の命を守るということを考えると、今回のやり方に変更したい。

という反省が出され、今回の訓練の意義を確かめることができた。

2　シナリオ通りは NG！防犯訓練

（１）問題点だらけの防犯訓練

本校では、例年行ってきた「不審者侵入に対する防犯訓練」が７月４日に位置付けられていた。６月の職員会で係から従来を踏襲する形での訓練計画が提案された。

・不審者侵入時に教職員が適切な判断のもと、落ち着いて行動ができるための訓練。

・児童は避難訓練と同様に発生場所から遠ざかりなが

ら「お・は・し・も」を守って逃げること。
であった。

計画では児童玄関より侵入した不審者にたまたま出遭った養護教諭が声をかけ、管理職に報告し、教頭の放送で児童は担任に率いられて体育館に避難するという内容になっていた。内容については、よくわからない部分や矛盾しているのではないかと思う部分もあったが、係案通りに実施し、問題点を洗い出すこととした。

訓練当日は、千曲警察署生活安全課の警察官に様子を見ていただき、訓練後に指導をしていただいた。ご指摘いただいたことは次のことである。

▲不審者に一人で対応しない。複数が原則。
▲児童向けの放送で「体育館へ」と言っていたが、不審者に児童のいる場所を知らせている。
▲児童玄関にいる不審者から１年生が階段を上がっていくのが丸見えである。２年生も通路の奥を歩かないと不審者の目に入っている。
▲体育館に避難したが、ガラス張りで子どもたちの姿が丸見えである。カーテンを引く、引けないのなら全員をステージに上げ、幕を引く。
▲さすまたが教室にあったが、意味がない。教室に不審者が入ってきても担任は闘えない。
▲今回の想定であれば、１年生は教室から動かないのが一番安全な方法であった。
▲それぞれが一番安全と思われる場所に避難した場合、人員確認は、不審者を警察に引き渡した後に行えばよい。

想定があり、それに従って動くというようなマニュアルだのみをしていると実際には適切な行動に結び付かず、命を守るための訓練にはならないということだった。

そこで、夏休みに改めて職員の防犯研修を実施することとした。

（２）正解はありません

７月30日、長野県公安委員会少年課の方を講師に、職員の不審者対応訓練・研修を実施した。防犯訓練の反省をふまえ、どのように行動すれば子どもたちやの命を守ることになるのかを重点に研修を進めることとした。

防犯訓練では想定が１つであったが、不審者が侵入した３つのケースを想定した。それは、

Ａ　１年教室のベランダから侵入
Ｂ　昇降口から侵入
Ｃ　音楽室の窓を割って侵入

の３つである。それぞれの場合、先生方は自分はどうしたらいいか、誰にどうやって連絡したらよいか、子どもたちをどう避難させていくかについて、考えて話し合った。しかし、話すほど、「これが正解」という方法にたどり着くことはできなかった。さらに、グループごとの話し合いの内容を発表しあったが、考えや方法も様々であった。

グループでの話し合い内容を説明

警察の方からは、「不審者対応には“正解”はありません。その時に最善の方法を見つけていくしかありません。しかし、このように考えて意見交換することで、意識を高め、臨機応変に行動できる力がついていくのです。」とお話いただいた。

その後、警察の方に「不審者役」になっていただき、ケースＡの侵入で実地訓練を行った。

警察の方は女性であったが、その迫真の言動に対応する職員もどうしたらよいか、頭をフル回転させている様子であった。長机を横にして道をふさぐと、「今、この足に机が当たった。けがをした。」「子どもに会わせろと、言っているだけなのになぜ事務室にいかなければならないのか。」などという言葉には、すぐに返す言葉が出てこなかった。

警察の協力による不審者対応訓練

不審者と判断される場合には、

・大きな声を出して、他の先生を呼ぶ。
・興奮している相手には毅然とした態度で接する。
・「ここは学校ですよ。」「警察を呼びますよ。」とい

った強い言葉の対応も必要である。

・窓ガラスを割るなどの行為があった場合はすぐに110番する。

などを教えていただいた。私たち学校職員は、来校者には失礼のないように丁寧な態度で接するという気持ちでいるが、子どもたちの安全を守るためには、このような態度も必要だということがわかった。

どうしたら情報を伝えられるか、子どもたちを、安全に避難させられるかなどについては、マニュアルではなく、その時の判断で最良と思われる方法で行動するしかない。万一の時に備えて、今回の訓練や研修のように、職員が対話しながら考えること、多様な方法をイメージすること、実際の訓練で緊迫感を体験すること等でそのようなカをつけていくことができるのではないだろうか。

常に危機感を持ち、考える教職員のもとで、自ら考えて行動できる子どもは育つのだと思う。

3 避難所の一夜から

10月12日、大型で強い勢力の台風19号が日本に接近していた。長野県でも朝から雨が降り続き、午後には各地で避難勧告が出される状況になってきた。

午後5時58分に千曲市でも警戒レベル4避難指示のエリアメールが流れ、市内の小中学校が避難所として指定された。

学校には事前に避難所の要請があり、校長・教頭教務主任で体育館を避難所として開設できるように準備をしていた。

八幡地区は、千曲川の西側にあり、堤防を隔てた低い土地にも住宅が広がっている。千曲川に近い地域の方が6時前後から学校に避難してきた。「避難所を開設する」という経験はなかったが、6時半ころに来た千曲市職員の方と学校で相談しながら避難所づくりを進めた。

避難所受付　黄色が市職員　緑が学校職員

午後7時を過ぎると風雨が強まり、避難所にはどんどん地域の方がやってきた。お年寄り、家族連れ、車いすの方など様々である。もちろん、八幡小学校の児童も何人も避難してきた。

日付が13日に変わるころには、200名を超える人

八幡小体育館避難所の様子

が体育館に避難していた。やがて風雨が収まり、早朝にかけてどんどん帰宅し、午前5時半には全員が家に戻った。八幡地区では一部浸水被害があったが、大きな被害にはならなかった。

一晩だけの避難所開設であったが、学校にとって「災害時に命を守る行動」について考える貴重な体験となった。

①地球温暖化などの影響もあり、今回の大雨は100年に一度ではなく、また見舞われる災害かもしれない。台風や浸水被害、土砂災害についての基本知識や命を守る行動について、学校の防災学習で扱っていく必要がある。

②今回、早朝までに全員が帰宅したが、他の地域の中には帰宅後に水害に遭っているところがあった。避難所を開設した側、避難した側双方にもっと危機感があってもよかったのではないだろうか。

③避難所開設に際し、ともに避難所づくりをしてくれた市民の方がいた。自分たちもともに運営していくという気持ちや行動力を育てていきたい。

今回の台風19号の災害から学んだことを本校の安全教育に生かしていかなければならないと思った。

4 来年度に向けての課題

自ら考え、命を守る行動ができる子どもを育てる安全教育の見直しと実践は、まだ始まったところである。来年度からまた、今年度の実施案を日付を変えただけで提案し、実施するようではまた思考停止の行事になってしまう。常に、より現実的に、さまざまな想定で、臨場感を持って、児童が考える場を設けていくように計画したい。

具体的には、次のような試みを考えている。

（１）避難訓練の工夫

〇始業前、清掃時、給食中等に火事や地震が起きた想定での避難訓練。

⇒始業前の場合、担任が欠席状況を把握でいていない状態で、どう人員確認するか。やらなければいけないこと、やっている途中のことをその場に置いて避難できるか。

〇専科の授業中の避難訓練。

⇒専科の先生の意識を高め、特別教室からの避難のしかたを身に付ける。

〇授業参観中の避難訓練

⇒保護者の安全意識を高める。保護者が子どもから学ぶ機会としてよいのではないか。

〇避難訓練日時を職員に知らせずに行う避難訓練。

⇒職員が緊張感の中でどう行動できるか自覚する機会となり、安全意識を高めることができる。

〇保育園と合同の避難訓練

⇒保育園が隣にあるので、日時を合わせ、保育園が校庭に避難してくるような形で実施できそうである。

（２）防犯訓練の工夫

今年度は、学校に不審者が侵入した場合に、全校児童が体育館に避難する訓練を行った。しかし、マニュアル通りに動くことの無意味さを実感する結果となった。そこで来年度は、

〇児童の防犯訓練は、校外で不審者に出会ったときにどうしたらいいかを考え、適切な行動ができるようにする防犯学習としたい。

〇職員の防犯訓練については、警察等の協力を得て、本年度のように行いたい。

（３）防災教育を広める

今までの小学校での安全教育は、火事や地震、不審者侵入などについて「学校で」の場面について扱ってきたことがほとんどである。しかし、子どもたちはやがて成長し、様々な場所で生きていく。数年後に津波の危険のある沿岸部の大学に通ったり仕事を得たりする子もいるかもしれない。長野県には津波は関係ないとは言えないのだ。

また、今回の台風１９号では、災害はいつ、どこで起きるかわからないことを実感した。風水害のときどのように行動し、命を守るのかを学ばなければならない。

他にも、大雪、ゲリラ豪雨、落雷、火山の噴火等についてもどんな災害で、命を守るためにどうしたらいいかを知り、考えていく必要があるだろう。

来年度は、２回目の避難訓練でも使った日本赤十字社の「青少年赤十字防災教育プログラム　まもるいのち　ひろめるぼうさい」を活用したい。具体的には、９月に行っていた地震⇒火事⇒避難という避難訓練を見直し、ワークシートを用いた防災教育授業として位置付けてみたい。毎年異なる災害について学ぶことで、防災学習を積み重ねていくことができると考える。

また、総合的な学習での取り組みもできそうである。八幡という地域を防災の目で見直すことで新たな発見があるかもしれない。八幡地域は千曲川のある場所から姨捨など、標高差が大きい場所に民家がある。例えば私たちの八幡小学校は、千曲川よりも少し高いところにあり、浸水の危険は非常に少ない安全な場所ととらえることができる。今までは感じなかったふるさとのよさを学ぶことができそうである。一晩、自分たちで「避難所」を運営する体験学習も有意義だろう。学んだことを地域に発信することで、子どもたちだけでなく保護者や地域の防災意識を高める学習へ発展していける可能性を感じる。

5　まとめ

今年度は避難訓練の見直しで、子どもたちが考えて自分の判断で行動する避難訓練をしていく方向に舵をとることができた。また、当たり前のように行ってきたこの行事の内容を検討することで、教職員の安全や防災に関する意識を高めることができた。これを続け、アップデートし続けなければならないと思う。

子どもたちが活躍する未来は、予測不能であり、自らが考えて切り拓いていかなければならないものである。その未来の「生きる力」を、防災や防犯などの安全教育を通してはぐくんでいけるように取り組んでいきたい。